

# ライフスタイル別の生活準備

## 第I報：ライフスタイルと生活意識

須田 博司 (東海女子短大)  
堀田 剛吉 (岐阜大学)  
古寺 浩 (金城学院大学)  
石原 敬一 (名古屋音楽大学)  
渡辺 廣二 (鳴門教育大学)

### はじめに

日本経済は1960年代世界に冠たる経済成長を果たし、所得水準も欧米並みにまで向上した結果、物質面における豊かさは充足された。生活水準が高まるにつれ、物の豊かさより心の豊かさを求める志向の高まりや自由時間活動志向の高まりが指摘されている。又、家計消費支出構成比を昭和40年と平成2年を比較すると「食料」「衣服」は減少し、「交通・通信」「教養娯楽」「その他の消費支出」が増加現象である。これは生活の基本である衣・食・住の生活は満ち足り、個人の好みによる支出が出来る時代に入ったと言える。それ故、今後益々個人の価値・目標が重視され、それに合わせた生活設計が大切な時代になってきた。

ライフスタイルを家政学的に定義すると『ライフスタイルとは、ファミリー・ミニマルが充足されたのちに、個人・家庭により、立体的に独自の生活の価値・目標が追求され、実践される過程及び結果に見られる暮らし方の傾向(パターン)である』。(注1)

そこで、本研究はアンケート調査を行い、先ずライフスタイルを整理することを目的とし、スタイル別生活意識を分析する。次に、生活設計を考える場合に、生活者個人が持つライフスタイルが積極的に取り入れられ、反映されているかを検討した。

その結果を、第1報『ライフスタイルと生活意識』及び第2報『ライフスタイルと経済準備』に別けて明らかにしたい。

第1報『ライフスタイルと生活意識』は、各人のライフスタイルを確認し、ライフスタイル別生活条件及び生活設計の内容等の意識を中心に考察した。

第2報『ライフスタイルと経済準備』は、家計支出がライフスタイル別でどのように反映しライフスタイル別生活設計がいかようにあるべきかを、経済準備を重点に置いて考察した。

## 1. 調査の内容と方法

### 1) 研究の目的

これまでに見られた生活設計指標は、与件としての生活条件(世帯属性を中心に)などによって整理されたものがほとんどで、ライフスタイルを中心としたものは余りなかった。そこで、本研究では第1報で生活者の持つ個々のライフスタイルによって、生活設計への対応や内容がどのように違うのを見出し、それをもとに第2報では経済準備を問題とし、ライフスタイル別生活設計と生活準備の内容と指針を作成することを目標とした。

第1報では「ライフスタイルと生活意識」を考察すべく、下記のような課題と課題にもとづく仮説をもった。

課題 ①各人のライフスタイルの確認

- ②ライフスタイル別での生活意識
- ③ライフステージ別での生活意識
- ④これらを通して、生活設計への課題と提言をする。

- 仮説
- ①ライフスタイルは生活条件（社会的条件及び世帯属性）によって差があるのではないか。
  - ②ライフスタイル別で生活の満足度に差があるのではないか。
  - ③ライフスタイル別で生活設計に対する準備意識が違うのではないか。
  - ④ライフステージ別ライフスタイルは異なるのではないか。
  - ⑤ライフステージ別で生活の満足度に差があるのではないか。
  - ⑥ライフステージ別で生活設計に対する準備意識が違うのではないか。

## 2) 調査の方法

調査研究の目的を達成するため、以下の様なアンケート調査表及び調査対象者で留め置きアンケート調査を実施した。

- ① A 調査票「ライフスタイルと生活設計」  
B 調査票「家計調査」の2種類のアンケート用紙を使用した。
- ② 都市・農村、年齢階層別、男女別のフェイスシートに見合う、幼稚園1園、小学校2校、中学校2校、大学2校及び2老人会を対象とした。
- ③ A 調査票の配布総数1,823で、有効回収票数は1,552 (85.1%)であった。又、B 調査票は同一調査対象者のうち378配布、307 (81.2%)の有効回収票数であった。
- ④ 有効回答者の内訳は、「男性793、女性750、不明9」・「都市(主に岐阜市・名古屋市)794、農村(主に岐阜県下)743、不明15」合計1,552である。
- ⑤ 調査期間は、平成3年7月～8月上旬に実施した。
- ⑥ 尚、調査と集計整理には岐阜大学4年生秋田広子の協力を得た。

## 3) 調査の内容

枚数の関係で調査票は割愛するが、設問内容、

概要は下記のごとくである。

### 「A 調査票」

- (1)フェイスシート ①居住地、②年齢、③性別、④職業(本人)、⑤職業(配偶者)、⑥家族構成(同居)、⑦子供の人数、⑧住居形態
- (2)調査内容
  - ①生活の満足度、②③ライフスタイル、④⑤生活設計、⑦～⑪家計の内容、⑥⑫⑬老後の生活準備

### 「B 調査票」

- 収入と支出、老後の生活準備にかかわる具体的な金額
- 第1報では、「A 調査票」の(1)フェイスシート、(2)調査内容①～⑤までの設問を使用して調査分析をした。

## 2. ライフスタイルの整理

一般にライフスタイルは、自分の新しい生活の創造を強く意識して使われている。今回筆者達は、家庭の生活条件をスペースにはおろが、家族の価値観・態度を重視した生活形式と考えた。したがって日常の家庭生活で区分される課題を中心に8つに区分した。

具体的なスタイルを示すと、次の如くである。

- (1) 食生活重視スタイル：一般的に家庭生活の意識調査によると、食生活はかなり大切にされている項目であった。とくに今回の分析課題である高齢者の生活問題を考えるとき、一層重要な問題となろう。
  - ①食べることを楽しむ生活
  - ②栄養のバランスを考える生活
  - ③食品材料にこだわる生活
  - ④料理づくりを楽しむ生活
- (2) 衣生活重視スタイル：衣生活は若干ゆとりのある層や若い年代層で重視される項目と考えられるが、とくに生活を楽しむ方向を重視した内容考えた。
  - ①ブランド品を身に付ける生活
  - ②身なりを整え、おしゃれを楽しむ生活
  - ③裁縫・手芸を楽しむ生活

④流行を取り入れることを楽しむ生活  
 (3) 住生活重視スタイル：住居は一生涯で、一度は建築する機会が多いが、土地購入・建築の金額が大きいので、広さよりむしろその住まい方をより大切に考えていくべきとした。

- ①部屋の模様替えを楽しむ生活
- ②家具・インテリアを楽しむ生活
- ③整理・整頓や空間の演出を楽しむ生活
- ④個人のプライバシーの場所を大切にする生活

(4) レジャー重視スタイル：近年週休2日制の施行や価値観の変化もあり、生活時間の活用もかなり変わってきている。この中で生きがいを持ちより楽しく生きるため、スポーツや旅行のみでなく、家庭内の趣味を生かすことまで幅広い内容を含めることにした。

- ①スポーツやスポーツ観戦を楽しむ生活
- ②国内・海外旅行を楽しむ生活
- ③テレビ・ビデオ・オーディオ等を楽しむ生活
- ④盆栽・家庭菜園や囲碁・将棋を楽しむ生活

(5) 教育重視スタイル：この中には自分の学

習と子どもの教育の両面を含んでいるが、今後高齢化時代と時間的ゆとりが出るので、生涯学習的意識で考えていく必要がある。

- ①お稽古事や文化サークル参加を楽しむ生活
  - ②各種の資格を取る事を大切にする生活
  - ③子どもの教育にお金をかける生活
  - ④読書や鑑賞・観劇を楽しむ生活
- (6) 老後生活重視スタイル：老後を豊かに生きるためには経済のみでなく、よい子育てや生きがいづくりなど幅広く準備しておく必要がある。

- ①老後のため収入を増やし・支出の節約に努力する生活
- ②老後生活のため貯蓄を大切にする生活
- ③親孝行の子供を育て、介護者づくりを大切にする生活
- ④老後の生きがいづくりを大切にする生活

(7) 家の格式重視スタイル：一般に自分にプライドをもち、家庭の体面を大切にしたり、近所づきあいや冠婚葬祭などにお金をかけるなどを楽しむ生活と考えた。

- ①家の体面を重視する生活
- ②冠婚葬祭にお金をかける生活

表1 ライフスタイル別選択者数

単位：人

重視スタイル	選択者数	重視スタイル	選択者数
食生活重視スタイル	242	衣・教育・文化重視スタイル	5
衣生活重視スタイル	23	衣・老後生活重視スタイル	2
住生活重視スタイル	60	衣・家の格式重視スタイル	1
レジャー重視スタイル	190	住・レジャー重視スタイル	12
教育・文化重視スタイル	53	住・教育・文化重視スタイル	4
老後生活重視スタイル	247	住・老後生活重視スタイル	3
家の格式重視スタイル	60	住・家の格式重視スタイル	1
食・衣生活重視スタイル	10	レジャー・教育文化重視スタイル	19
食・住生活重視スタイル	19	レジャー・老後生活重視スタイル	59
食・レジャー重視スタイル	32	レジャー・家の格式重視スタイル	27
食・教育・文化重視スタイル	13	教育文化・老後生活重視スタイル	10
食・老後生活重視スタイル	61	教育文化・家の格式重視スタイル	2
食・家の格式重視スタイル	10	老後生活・家の格式重視スタイル	44
衣・住生活重視スタイル	6	まんべんスタイル	334
衣・レジャー重視スタイル	3	計	1,552

③親戚や近所づきあいを大切にする生活

④地域の慣習・伝統を大切にする生活

(8) まんべんスタイル：それぞれの生活分野をほぼ均等に満足できるように考えるものであり、なりゆきなかせな生活とは異なる。この中では一般に必要な健康や生活の安定・将来生活の発展などをできるだけ満足できるものとする。

[備考] これら項目は、井上優の「ライフスタイルマーチャライジング」の内容や堀田剛吉・石原敬一の調査した「高齢化社会の生活準備調査」に使った項目を参考にして作成したものである。

では今回具体的にどのように調査結果を整理したかを解説しておこう。

まずスタイル別に前述の4項目合計28項目出したが、調査ではそのうち10項目を選択させた。(但し、7つ以上選択されていない調査のものは有効回答とみななかった)。

そしてそれぞれのスタイル項目のうち、3つ以上選ばれたものを一応重視したものとして命名した。

28項目中10項目選ばせた中で各スタイル4項目中3項目選んだということは、かなり重視したと考えたからである。

実際その結果は、前頁表1のごとく命名した。なおまんべんなくスタイルは、これら重視スタイルに入らない。

### 3. 生活条件別ライフスタイル

ライフスタイルは生活条件(社会的条件及び世帯属性…以下省略)によって、当然違いがあると考え検討した。

まず、都市・農村の地域によるライフスタイルは、両地域共「老後生活重視」が1位を占め(都市21.4%・農村24.1%)、都市は「レジャー重視」(20.9%)、「食生活重視」(20.4%)と続くが、農村は「食生活重視」(19.9%)、「まんべんなく」(19.1%)になっている。「家の格式重視」が農村では9.7%に対し、都市では5.4%

と差がでているが、レジャー重視は都市の方は5.6%高くなっている。

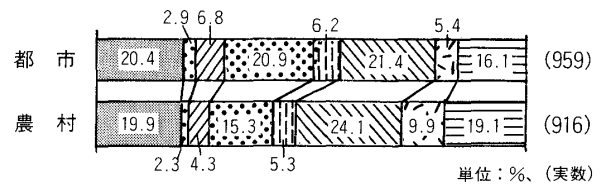


図1 都市・農村別ライフスタイル

■食生活 □衣生活 ▨住生活 □レジャー  
▨教育重視 ▨老後生活 ▨家の格式 ▨まんべん

交通・通信の発達や情報の進歩により都市・農村での多くの差異はないが、農村では「家の格式」や「老後生活」を重視し、地域との連帯意識がライフスタイルでも伺える。

次に男女別で見ると大きな差異が見られる。図2のように男性の「レジャー重視」(男26.5%に対し、女8.9%)、女性は「食生活重視」(29.2%、男12.5%)と大きな差異がある。その他「家の格式」や「住生活」も数値の差は多くないが男女差が出ている。女性は家庭内全般・目先のことに気を使う生活と思われ、食生活重視に続き「まんべんなく」が多く、男性のレジャー重視の次に「老後生活」がくるライフスタイルと違いが分析出来た。

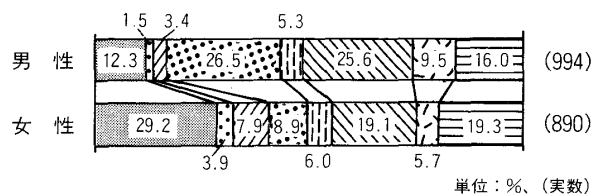


図2 男女別ライフスタイル

■食生活 □衣生活 ▨住生活 □レジャー  
▨教育重視 ▨老後生活 ▨家の格式 ▨まんべん

更に大きな差異があると思われる、年齢別によるライフスタイルを分析する。

年齢別ライフスタイルは、20歳代「まんべん」30. 40歳代「食生活」、50歳以上「老後生活」重視と違いが明確にでた(図3参照)。

20歳代はライフスタイルが定まっておらず、他の年齢層と違い各ライフスタイル数値に片寄りが少ない。特に顕著なのは「衣生活重視」が

14.1%（平均2.6%）と若い世代の特性がでている。

30歳代も20歳代と同様と言えるが、「食生活重視」が24.2%と各年齢層の中で1番高い数値となっている。この年代は子供の成長過程の時期でもあり、食べ物への関心が高いと思われる。又「住生活」・「衣生活」も40歳以上との差異があり、持ち家計画時期でもあると考えられる。

40歳代は「食生活（23.4%）」、「老後生活（20.3%）」、「レジャー（19.2%）」、「まんべん（18.1%）」の4スタイルに集中し、子供の成長と共にライフスタイルも多様化傾向になる。

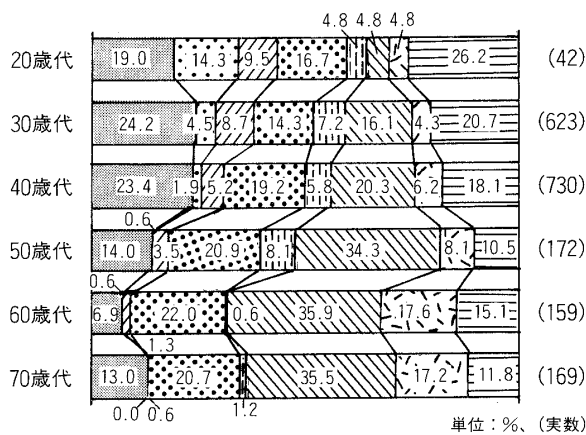


図3 年齢別ライフスタイル

■ 食生活 ■ 衣生活 ■ 住生活 ■ レジャー  
 ■ 教育重視 ■ 老後生活 ■ 家の格式 ■ まんべん

しかし、50歳以上になると急速に「老後生活重視」のスタイルが増加し（50歳代-34.3%、60歳代-35.9%、70歳代-35.5%）、老後生活の準備や生きがいについてが重要課題になってくる。同時に余暇活動時間の増大に伴い「レジャー重視」の数値も20%以上と高くなっていく。60歳以上で特筆すべきは「家の格式重視」も他の年代の3倍以上になり、老後生活は近隣との交際も大切になってくる事が伺える。

職業別ライフスタイル調査は本人及び配偶者調査をしたが、ここでは本人の職業で分析した。全ての職業で「老後生活重視」スタイルが多く、差異は外勤の常勤・自営業に「レジャー重視」が多く、外勤のパート・内職・無職の人に「食生活」重視が多かった。

これは分析出来なかったが、外勤の常勤・自営業に男性が多く、外勤のパート・内職・無職の人に女性回答者が多くあったと思われる。数値の差は大きくないが、自営・自由業の人に「家の格式」重視が、外勤のパート・内職者に「住生活」重視が多かった(表2参照)。

居住条件別では、調査結果では持ち家居住が82.0%の多くに達し、借家対象者は13.2%であった。それ故、持ち家対象者だけを取り上げて分析を試みた結果が表3のごとくである。

持ち家・ローン有りの人を基準としてみると、

表2 職業別ライフスタイル

単位: %, ( ) 実数

	食生活	衣生活	住生活	レジャー	教育重視	老後生活	家の格式	まんべん	合計
外勤の常勤	14.7	1.9	5.5	23.7	7.1	21.3	7.7	18.1	100.0 (675)
外勤パート	30.6	3.1	9.4	11.3	5.6	15.0	2.5	22.5	100.0 (160)
自営業	19.1	2.7	4.4	19.4	4.2	26.0	9.3	15.0	100.0 (408)
自由業	18.2	4.5	0.0	4.5	4.5	31.9	9.1	27.3	100.0 (22)
内職	30.7	2.2	7.3	10.3	3.6	21.1	3.6	21.2	100.0 (137)
無職	23.6	2.9	5.7	14.3	4.8	23.3	10.0	15.5	100.0 (420)
その他・NA	21.9	6.8	1.4	13.7	8.2	24.7	2.7	20.6	100.0 (73)
合計	20.4	2.6	5.5	18.0	5.6	22.5	7.7	17.7	100.0 (1,895)

表3 住居形態別（持ち家）ライフスタイル

単位：％、（ ）実数

持ち家	食生活	レジャー	老後生活	家の格式	まんべん	計
親から	25.5	17.9	24.6	11.7	20.3	100.0 (608)
ローン有	25.6	23.7	23.3	7.5	19.9	100.0 (520)
ローン無	15.7	25.1	30.5	9.6	19.1	100.0 (426)

持ち家・親からの人は「家の格式重視」が多く、「レジャー重視」が少ない数値である。これは近隣・親族との付き合いを大切にすると同時に、「食生活」・「老後生活」を重視するスタイルでもある。持ち家・ローンなしの人は「老後生活」・「レジャー重視」が多くあり、これからの人生を考える事が出来る階層であると言える。

その他の生活条件（家族構成・子供の人数）についても調査したが、大きな差異はなかった。子供の人数によって「教育重視」・「レジャー重視」等差異が有ると思えたが、明確な違いは出なかった。

以上、生活条件別ライフスタイルを分析してきたが、男女別、年齢階層別、職業別、居住別ではスタイルの違いが出たが、その他の生活条件別で特筆するような差異はなかった。

#### 4. ライフスタイル別生活意識

ここでは、ライフスタイル別で、生活の満足度及び生活設計に対する準備意識の違いを検証

してみる。

先ず総務庁及び貯蓄広報中央委員会の全国調査による「現在の生活に対する満足度」及び「生活設計の策定状況」をみると表4・5である。

生活満足度は全般では63.1%が満足している。内訳で物の面の満足度は高いが、経済・時間では満足度は半数以下である。生活設計も立てている者が37.2%と少なく、特に若い世代と高齢者層が低い。年代が高くなると共に生活設計の必要性が出てくる傾向である。

今回の調査での全体の満足度は70.9%、不満の15.1%と、全国数値との差異が出ている。

これらをライフスタイル別で分析すると、「家の格式重視」は実に82.7%の人が満足をしている。「レジャー」74.3%、「老後生活」重視72.1%と続き全国平均よりも高い数値である。

満足度が低いのは「衣生活」54.0%、「住生活」重視62.8%である。当然、不満度の高いも「住生活」23.8%、「衣生活」重視22.0%である。

「家の格式・レジャー・老後生活」重視スタイルは経済的にも比較的安定していると思われる

表4 現在の生活に対する満足度「総理府調査平成元年度」

単位：％

	十分満足	一応満足	まだまだ不満	きわめて不満	わからない	合計
所得・収入	2.6	38.5	46.1	9.1	3.7	100.0
資産・貯蓄	1.8	28.9	50.1	13.9	5.4	100.0
耐久消費財	5.8	61.4	24.5	3.9	4.4	100.0
レジャー余暇生活	3.7	40.1	38.9	11.3	5.9	99.0
全体	5.4	57.7	30.8	5.1	1.0	100.0

資料：総理府「国民生活に関する世論調査」

(注) 平成元年の調査対象 全国の1万人（回収率77.4%）

平成元年の調査時期 平成元年5月

貯蓄広報中央委員会「生活設計と貯蓄」より作成

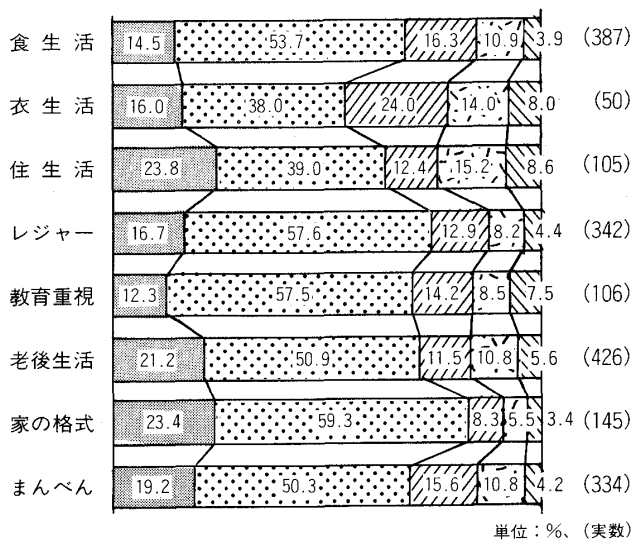


図4 ライフスタイルと生活の満足度

■ 満足 □ まあまあ満足 ▨ どちらとも言えない  
▩ やや不満 ▪ 不満

るが、逆に不満度の高い「住生活」は建築資金、ローン返済等があり不満も多くあるのではないか。「衣生活」重視は若い年齢層が多く、どちらともが24.0%あり、生活に対する満足度の意識が明確でないのではないか。

次に生活設計の期間であるが、「貯蓄に関する世論調査」によると、立てている37.2%・立てるつもりはない30.3%・これから立てるつも

り31.3%に対して、今回調査全体で計画を全く立てていないのは僅か17.8%で、1年～3年は33.2%・5年～10年以上は45.7%とほとんどが生活設計に対して取り組んでいて、全国調査より非常に高い水準であった。

ライフスタイル別で見ると、「教育重視」が5年以上の長期に53.7%・1～3年で35.8%で、立てていないのは僅か5.7%の数値であった。次いで「老後生活」重視が10年先31.7%・5年先22.5%と続いていた(表6参照)。

「教育・老後重視」は長期計画の必要性があり当然の結果であるが、それにしても高い数値である。

全く計画を立てていないは、「住生活」23.8%・「家の格式」21.4%・「食生活」19.1%・「まんべん」18.9%と続くが、生活不満度の高い「住生活」重視は生活設計も立てていない者が多い事が明らかになった。

しかし「家の格式」重視は生活満足度が一番高いけれど、生活設計も立てていない者も多く、このスタイルは高齢者層が多く、居住・経済条件等が安定していると思われる。「衣生活」重視は1～5年で40.0%あり比較的若い層が多く、本来一番必要な年齢階層であるが長期の生活設計を立てる事が出来ていないと言える。

更に生活設計の内容をみると、図表にはしな

表5 生活設計の策定状況「貯蓄広報委員会調査・平成元年度」

単位：％

	立てるつもりはない	これから立てるつもり	立てている	立てている				小計
				1～2年先まで	3～5年先まで	10年先まで	20年以上先	
全体	30.3	31.3	37.2	5.0	24.3	49.1	21.4	99.0
20歳代	13.4	54.9	30.5	8.0	28.0	42.0	22.0	100.0
30歳代	21.6	43.1	34.8	6.5	30.8	39.2	23.5	100.0
40歳代	25.2	35.4	39.2	4.1	23.4	53.5	18.7	99.0
50歳代	28.6	28.4	41.7	4.1	23.6	47.4	24.7	99.0
60歳代	44.6	16.9	36.3	3.6	20.9	54.9	20.5	99.0
70歳以上	56.7	15.5	24.4	14.1	21.1	49.3	15.5	100.0

資料：貯蓄広報中央委員会「貯蓄に関する世論調査」

(注)「生活設計の策定期間」欄は立てている世帯を100とした割合  
平成元年の調査対象 全国の普通世帯6,000世帯(回収率70.8%)  
平成元年の調査時期 平成元年6～7月

表6 ライフスタイルと生活設計の期間

単位：％、( ) 実数

	先の計画は全く立てていない	1年以内の計画を立てている	2～3年程先のことまで計画を立てている	5年程先のことまで計画を立てている	10年程先のことまで計画を立てている	その他・NA	計
食生活	19.1	9.0	24.0	19.4	25.6	2.9	100.0 (387)
衣生活	18.0	16.0	24.0	12.0	24.0	6.0	100.0 (50)
住生活	23.8	8.6	20.0	16.2	28.6	2.9	100.0 (105)
レジャー	17.3	7.6	25.1	22.5	25.1	2.4	100.0 (342)
教育重視	5.7	9.4	26.4	22.7	31.1	4.3	100.0 (106)
老後生活	16.7	9.6	20.7	17.6	31.7	3.8	100.0 (426)
家の格式	21.4	8.3	22.8	19.3	23.4	4.8	100.0 (145)
まんべん	18.9	12.0	25.7	20.7	19.5	3.3	100.0 (334)
計	17.8	9.6	23.6	19.6	26.1	3.3	100.0 (1,895)

かったが「家の格式重視」を除いた、全てのライフスタイルで経済に関する事が第1位であった。特に「教育重視」は50.0%が経済であり、このスタイルは長期生活設計も立てられている。「家の格式」重視は健康に関する事が第1位で31.0%あり、「老後生活(28.4%)・食生活(25.8%)」よりも大切な条件になっている。生きがいに関する事は数値は高くないが、「教育」14.2%・「衣生活」14.0%・「住生活」11.4%と続いているが、生活時間、家族・人間関係に関する事は僅かであった。

最後に、ライフスタイル別生活意識の特徴をまとめると「家の格式重視」は生活の満足度は高く、生活設計期間は5年以上の長期は40.2%・1～3年は37.7%で、全く立てていない者も18.9%あった。設計内容も健康重視が多く、生きがいも11.0%あり、高齢者が多く・安定した居住・経済条件が備わっていると言える。

「教育重視」は満足度は平均的であるが、長期設計を立てている人が多く、その内容も経済が半数であり、生きがいに関しても他のライフスタイルより高くなっている。

「食生活・レジャー重視」は満足度・設計期

間・設計内容も平均的である。

「衣生活・住生活重視」は不満度が他より高く、設計内容も経済・健康に次いで生きがいが高げられ、他のライフスタイルと多少違いがある。

## 5. ライフステージ別生活意識

今回は年齢別で調査をしたので、ライフステージ別で見る事が出来ないのので、参考までに年齢に該当するステージとその特徴を述べる。

### ①夫婦前期(男28～30歳、女25～27歳)

子供を生む準備期、一般には共働きの時期で経済的ゆとりは比較的ある。

### ②親子同居前期(男30～45歳、女27～42歳)

養育期、学校教育前期・後期の時期で女性も家事・育児に重点を置くが、子供の小中学校進学により家事も離れ、社会参加もでき、パートが急増する。学資や持ち家の準備をする時期でもある。

### ③親子同居後期(男45～55歳、女42～52歳)

子供独立期で大きなお金が掛る時期である。反面、夫婦の老後の生きがいや、地域活動も



表7 ライフステージ別にみたゆとりと自由時間の使い方に対する満足度「経済企画庁」

単位：%

	独身		末子就学前		義務教育		高校・大学		高齢夫婦	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
総合的ゆとり	50	61	38	44	39	46	38	49	57	61
経済的ゆとり	50	57	28	38	32	41	32	43	41	49
時間的ゆとり	47	58	40	44	46	59	38	51	79	77
空間的ゆとり	61	71	48	54	45	56	55	61	65	67
精神的ゆとり	53	64	46	57	45	52	46	54	57	60
自由時間の使い方の満足感	53	63	57	44	51	61	55	67	88	82

(備考) 1. 経済企画庁「平成元年度国民生活選考度調査」により作成

2. ライフステージ設定の基準は次のとおり。

独身……ライフステージが「生徒・学生」、「独身社会人」である者。

就学前……ライフステージが「末子が幼稚園に入る前、幼稚園時代の親」である者。

義務教育……ライフステージが「末子が小学生、中学生の親」である者。

高校・大学……ライフステージが「末子が高校生、大学、短大、大学院生の親」である者。

高齢夫婦……60歳以上で同居人数が2人、配偶者と同居下にいる者。

3. 百分率の数値は、ゆとりがある、あるいは自由時間の使い方に満足しているとする者の割合を示す。

考える時代である。

④夫婦後期Ⅰ（男55～65歳、女52～62歳）

退職金などが入り、余裕のある時期であるが、老後の経済準備を考える時期でもある。

⑤夫婦後期Ⅱ（男65歳以上、女62歳以上）

収入は大幅に減少するが、生きがいづくりを大切にすると共に近所付き合い、友人との交際が必要であり、又体の衰えが目立ち、老後の介護者を考える必要がある。

上記のライフステージで、経済企画庁・国民生活選考度調査「ゆとりと自由時間の使い方に対する満足度」結果をみると、独身時代は全ての面でゆとり・満足度が高く、親子同居期になると経済的ゆとりを中心に満足度は低くなり、夫婦後期になるとゆとり感も増加してくる。男女別でみると、どの項目も男性より女性の方がゆとり感・満足度も高い数値である(表7参照)。

今回の調査を分析すると、先ず生活の満足度は年齢増加と共に高くなる(図5参照)。60歳以上は満足32.0%・まあまあ満足53.1%で85.1%が満足感を持っているのに対し、20歳代は満足15.1%・まあまあ満足52.8%で67.9%が満足感を持ち17.2%の差が出た。しかし全国平均よりも高い数値ではある。

40・50歳代は親子同居前・後期に当たり、教

育費・住宅ローン等経済的に苦しい時期であるが満足度は高い(40歳代68.3%、50歳代71.7%)。しかし、どちらとも言えないが他の年代よりも多い傾向が出ている(15.1%、18.1%)。

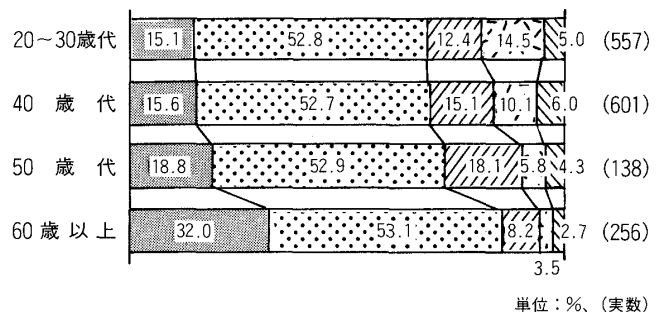


図5 年齢別生活の満足度

■ 満足 □ まあまあ満足 ▨ どちらとも言えない  
▧ やや不満 ▩ 不満

それ故、生活設計を立てている期間でも、40・50歳代は長期計画を立てている者が多い。数値を見ると、10年先まで—40歳代28.6%、50歳代31.8%、5年先まで—21.5%・26.1%となり、20歳代・60歳代とかなりの差があった(表8参照)。

20～30歳代は全く立てていないのが19.6%、1～3年以内が37.5%と比較的目先の計画しか立てていない。子供養育期の時期であり、今回

表8 年齢別生活設計の準備期間

単位：％、( ) 実数

	先の計画は立てていない	1年以内の計画を立ててる	2～3年程先まで計画を立て	5年程先まで計画を立てて	10年程先まで計画を立てて	その他・NA	合計
20～30歳代	19.6	12.2	25.3	17.4	19.8	5.6	100.0 (557)
40歳代	16.8	8.7	23.3	21.5	28.6	1.2	100.0 (601)
50歳代	8.7	8.7	21.0	26.1	31.9	3.6	100.0 (138)
60歳以上	23.4	10.5	20.3	15.2	25.8	4.7	100.0 (256)
計	18.2	10.2	23.3	19.4	25.3	3.6	100.0 (1,552)

調査及び全国調査でも「ゆとり・満足度」は一番低い数値が出ており、日常生活に追われていると考えられる。

一方60歳以上は、先の計画は立てていないが23.4%と年代別では一番高い率である。又10年先までも25.8%あった。この年代はこれまでに諸々な対応をし一応の設計が出来ており、長期の設計でなく短期設計で対応出来ると推察出来る。それらが生活の満足度の高い数値に出ている。

生活設計の内容を見ると、60歳以上を除いた各年代とも「経済に関する事」(20～30歳代43.3%・40歳代41.1%・50歳代39.1%)、次に「健康に関する事」(15.3%・23.6%・27.5%)となっている。60歳以上になると「健康に関する事」32.0%が第1位となり、第2に「経済に関する事」19.1%と続く。年齢増と共に健康に関する数値が高くなり、逆に経済に関する事は若年齢層に関心が高くなっている。

その他、生きがいに関する事も、60歳代12.1%、50歳代9.4%と20～30歳代の5.9%と差がある。親子同居後期、夫婦前期・後期に入り自分自身の問題として考える当然の結果であろう。

前記3.『生活条件別ライフスタイル』でも述べたように、20歳代は「まんべんスタイル」、30・40歳代は「食生活重視」、50・60歳代以上は「老後生活」重視と年齢別ライフスタイルの特徴がライフステージ別生活意識に対しても出

ている事が考察出来た。

## 6. ライフスタイル別の生活準備

以上各家族の価値観・家庭経営の重要目標によりライフスタイルを決定し、それをもとにした生活課題を分析してきたが、これらを通して今後のライフスタイル別の生活準備課題を検討したい。

### (1) 食生活重視スタイル

被調査者は一般に健康を大切にする意識が強いが、とくに40歳代までの子育て時代に食生活重視者は多い。この時期は経済的にもあまり余裕がないので、生活上重要な問題として子どもを健康に育てることを考えるためであろうし、女性にこの傾向がきわめて強い。しかし今後は老後の生活でも健康問題を大切にすべきであり、そのため栄養や食べることをたのしむことを重要としていくべきであろう。最近外食費は1人年平均153,644円にもなり、生活費中外食費が14%程度も占めてきている。食生活の充実には経済的負担はあまり大きく増えないが、一般に外食と調理食品を多く使うことが、収入階級の高い層に強くみられる。これをふまえて若いうちから食べるたのしみと健康を考え、能率的に調理をたのしむ姿勢をもつ努力が必要であろう。

### (2) 衣生活重視スタイル

みだしなみをよくし、楽しむことは一般に好ましいことであろうが、衣生活重視の姿勢は今

回20歳代を除いてあまり強くはなかった。また性別でみると僅に女性にその傾向が強かった。また若さを保つため着飾る気持ちも必要であろうが、これを老後の準備と考える人はきわめて少なかった。これもぜいたくをするとかなり金額もかゝるが、経済的負担の大きくかゝらない形の中で、これを生きがいづくりに利用することも考えてよいと思われる。

### (3) 住生活重視スタイル

今回の調査で住居を生涯借家ですごす人はきわめて少なかったが、若いうちの住居をつくる考え方の人は多く、女性に一層その強さが出ていた。これは取得に金額が大きくかゝるので、若いうちから長期間かけた計画・準備が大切になる。

### (4) レジャー重視スタイル

一般にレジャー時間は、今後増加傾向が強くなるが、今回の調査でレジャー重視者は、老後生活重視者について多く、また男性にその傾向が強かった。とくに年をとってもレジャーは大切にする姿勢が出ていた。収入階級でも消費支出中に占める教養娯楽費の比率は大きく、近年は必需的になってきている。したがって生涯よいレジャーをもつには、それなりに準備が必要になる。まず若い時から体力づくりや、楽しいレジャー技能をもつ努力も必要である。また他力的に見る・聞くのレジャーでなく、活動的レジャー、人格向上的レジャーを大切にしていくべきであろう。

### (5) 教育・文化重視スタイル

全体的にみるこのスタイルを重視するものは多くないが、30歳代と50歳代にその傾向がやゝ強い。しかし反面高齢者には関心はきわめて弱い。一般に家庭教育費は、大学への進学と関係深い面もあるが、生涯学習としてみていく必要がある。全体的に経済的負担は若い層に差が出ようが、高齢者の学習を今後は大切にしていくべきであろう。これは経済的準備より地域の社会教育の充実をはかるとともに、比較的若いときから進んで読書をし、講演会などに出るなど意欲的に行動する習慣をつけるべきであろう。

### (6) 老後生活重視スタイル

50歳代以降になると老後生活重視の意識は強くなるし、男性に一層この傾向がある。しかし60歳以降になっては経済面などすでに遅い場合が多い。また老後生活重視には、経済的準備が最も重要であることは確かであるが、同時に生きがいをもつ、健康管理を正しくする、同居形態・家族を含め介護をしてもらう人を考えておく、など幅広い準備が大切である。

### (7) 家の格式重視スタイル

今回の調査で家の格式重視者は、平均第5位と高くなかったが、この重視者が年代別で高齢者に片寄っているところに特徴がある。したがって将来更に軽視されるのか、若い層が年代の進むにつれてこの重視者が増えていくのかを検討する必要がある。なお人間が家の格式を大切にしすぎるのは、不合理な面も残るが、家の対面を大切にするため生活面で向上努力する姿勢が育てば好ましい面もあろう。

### (8) まんべんスタイル

まんべんスタイルは、特徴のない平凡な生き方とも考えられるが、全体的向上を考えている型である。今回の調査では若い年代にはやるべき問題も多くあり、まんべん型になる傾向が強くなり、50歳代以降の年代はこの傾向は弱くなった。また女性にはこの意識が比較的強い。この中で生活を全体的に向上させる姿勢は重要であるが、具体的に筆者は健康に生きる、老後生活の準備をする、生きがいをもつ、人間としての向上のため教育を受ける、などを重視していくべきであると考えられる。そのためには生活面のロスを少なくすることや、順序性をもって対応していく必要がある。

以上今後の生活準備は、各家族の価値観を重視してできるライフスタイル別に生活設計をおこなうべきと考えているが、同時に地域住民や企業・行政のよりよい環境づくりへの協力も大切である。なお経済的問題に対する提言は、第2報にゆずりたい。

注1) 日本家政学会家庭経営部会編『「日本型福祉社会」と家庭経営』新評論、1981年中の論文「ライフスタイルと生活設計」(堀田・田中共筆)に多少手を加えた定義である。

「生活設計と家庭科教育」(堀田・杉原編)、家政教育社、P 35より

### 参考文献

1. 九州家計学研 高齢化社会と家庭生活 1987. 4 九州大出版
2. 厚生省人口問題研 高齢人口の移動に関する人口学的研究 昭和63年度 厚生省人口
3. J. A. クローセン著 佐藤・小島訳 ライフコースの社会学 1987. 12 早稲田大出版
4. 砂川肇 ライフスタイルの解剖学 昭和63年3月 中央経済社
5. 生保文化センター 自分主義の時代 昭和63年5月 東洋経済
6. 統計研究会 高齢社会のコーホートの分析 平成3年1月 生保文化センター委託研究 統計研究会
7. 福武直・原沢道美 21世紀高齢社会への対応 1-3巻 1985. 5 東大出版